



あん こく おう じ おお がた きょう
暗黒の王子・大形京

いし ざき ひろ し あ さ み
石崎洋司／作 亜沙美／絵
ふじ た かおり
藤田 香／キャラクター原案



講談社 青い鳥文庫

もくじ

このお話 ^{はなし} にてで ^{ひと} てくる人たち	3
第一話 黒魔法使いが目覚めるとき	5
1 『ヘビとはしご』ゲーム	7
2 “ボッチ”少女の黒いオーラ	23
3 目撃！ほんものの“学校の怪談”！	36
4 見知らぬ森の怪しい洋館	52
5 ゲームの魔力	70
6 ミニョンヌの告白	86
7 “ふつうの”小五男子、大形京	106
8 黒魔法使いが目覚めるとき	127
第二話 いつか王子さまが……。	147
1 夏の終わりの夢か、現か、幻か	149
2 初夢は悪夢	170
3 蠅の王子	197
4 暗闇、そして、希望	217
5 『幽霊なんていないの、人は死んだら灰になって、はい、さよなら、なの』	236
6 いつか王子さまが	250
その後……	274
今回初登場の読者キャラ&魔法	276

はなし ひと
このお話にでてくる人たち

くろとりちよこ
黒鳥千代子 (チョコ)

おおがた
大形のクラスメート。
ぜっさん くろ まじょしゅじょうちゅう
絶賛、黒魔女修行中！

おおがたきょう

大形京

ひだりて
左手にいつもぬいぐるみを

つけているせいで、

こどく まいにち おく
孤独な毎日を送っている。

きょうたい まりよく も
じつは強大な魔力の持ち主。

ギュービッド

チョコの

くろ まじょ
インストラクター黒魔女。

くち わる
めちゃくちゃ口が悪い。

あん ごる も あ
暗御留燃阿

くろ まじょ
インストラクター黒魔女。

おおがた まりよく
大形の魔力を

ふう
ぬいぐるみで封じた張本人。

第一話

黒魔法使いが目覚めるとき



びくびく動くよ 親指が
邪悪な何かが やってくる。

〔新訳 マクベス〕 シェイクスピア

河合祥一郎・訳／角川文庫

1 『セリビエンテス・イ・エスカレラ』ゲーム

「あーあ、だねえ。」

校門を出たところで、声がもれた。

「今年もまた同じなのかな、だねえ。」

「なんだか、そうなりそう、だねえ。」

すれちがったおじさんが、ぼくをぎよつとふりかえる。それは、おしゃべりの相手が、左手にはめたリスのぬいぐるみだから。けど、そんなこと、気にもならなかった。

ひっかかっていたのは、きのうからはじまった五年生の一学期。クラス替えがあつて、一組になった。前に同じクラスだった子もいるけど、新クラスは新クラス。

今年こそやり直そう。そう心に決めていたのに……。

「となりの席が、また須々木凜音さんだったなんてねえ。」

「須々木さんも『また大形くん!?』って、うめいてたねえ。」

「しかたないねえ。一年生からずっと同じクラス、席もとなりだものねえ。」

「でも、静かにしてほしかったねえ。みんながぼくをチラ見してきたねえ。」

「だれも声には出さなかった。けど、視線で交わす会話の中身は、はつきりとわかった。」

「あれがぜったいにぬいぐるみを手放さない大形京くん？」

「そう。いつもぬいぐるみと話してる不思議ちゃん。」

「言葉の最後にならず『だねえ』をつける変な子だよ。」

「第一小に入学したときから、ずっと同じことをいわれ続けてきた。」

そして、ぼくも同じようにずっと、自分に問いかけてもきた。

いったいどうしてこんな子になったんだろう、なんのおぼえもないのに、って。

ママの話では、幼稚園を卒園した日、とつぜんこうなったらしい。

外遊びから帰ってきたぼくは、左手にリスのぬいぐるみをつけ、胸にはクマとウサギの

ぬいぐるみをかかえていた。だれかにもらったのか、どこかでひろったのか、いくら聞い

ても答えない。ただ、その日から、三つのぬいぐるみのうち、どれかひとつをかならず左

手にはめ、決して放そうとしなくなつた……。

ママは、そして第一小に入学してから先生方も、なんとかしてぬいぐるみを手放させようとしたそうだ。けれど、ぼくは、がんとして拒否。無理に取ろうとすれば、大声で泣きわめいたり、暴れたり。それで、いつしか、あきらめてしまったんだとか。

そんなぼくに、まわりの生徒たちもあつけにとられるばかり。同級生もイジろうとはしなかった。上級生にからかわれたり、下級生から笑われたりなんてこともなかった。

ただ、みんなに距離をおかれ、見て見ぬふりをされて。毎日、ほぼ透明人間状態。

そして、それがきのうも今日も続いたつてことは……。

「五年生も同じだねえ。きつと卒業までずつとこのままなんだねえ。」

「でも、だねえ。ワンチャン、六年生でクラス替えがあるかも……。」

ぬいぐるみが『だねえ。』といいかけたところで、うしろで大声がした。

「なにいつてるの？ ぜったいあたしに決まつてるでしょ！」

「そんなことない！ ショウくんの本命は、百合い！」

ふりかえると、女子が三人、激しく言い争いながら、こつちへ歩いてくる。

きりつとした目のクールビューティーな子に、ヒラヒラレースのぶりつ子。それに、キ

ラキラのロンT&ミニスカートにブーツというど派手な子。

「一路さん、春野さん、あと紫苑さんだねえ。」

三人はぼくを見て、どうするだろう。『あ、大形くん。』って、声をかけてくれるかな。

三人とは初めていっしょのクラスになるわけだし、もしかしたら……。

「そんなわけないねえ。無視して追いこしてただけだねえ。」

ぬいぐるみの言葉に、胃のあたりがきゅつとなつた。

「そんな……。これ以上無視されるの、もうたえられないかも、だねえ……。」

いままで感じたことのない気持ちに、ぼくはパニックに。気がついたときには、かたわ

らの公園にかけこんでいた。

「もう、けんかはやめよおう。チョコに占つてもらえばすむことなんだからあー。」

まるめた背中のうしろを、紫苑さんの声を通りすぎていく。

「ま、結果はあたしって、出るだろうけどお。」

三人の声が遠ざかり、やがて聞こえなくなつた。

ほつと息をついて顔を上げると、目の前に広がっていたのはがらんとした公園。ブランコ、砂場、飛行機の形をしたジャングルジム。お昼前だからか、人っ子ひとりいない。

「なんだかつかれちゃったねえ。」

「ちよつと休もうか、だねえ。」

よろよろとベンチに近づいたところで、ふと、足が止まった。

ベンチの上に木の箱があつた。縦が二十センチ、

横は四十センチぐらい。まんなかから上下に分かれて

開くふたがついている。

「お絵かきセットかな、だねえ。写生をしてた人が

おき忘れたのかも、だねえ。」

「こんな大きなもの、忘れる？　だねえ。それに不

思議な模様がついてるねえ。」

ぬいぐるみのいうとおり、木のふたには、線を組

み合わせた記号とも模様ともつかないものが、いく



つも彫^ほつてある。

〈X X ↑ ↓ X X〉

「外国^{がいこく}の言葉^{ことば}かな、だねえ。こんな文字^{もじ}、

見た^みことないけどねえ。」

「木箱^{きばこ}もずいぶん古^{ふる}びてるし、お絵^えかきセツトには見え^みないねえ。」

だとしたら、なにが入^{はい}つているんだろ。

そういや、ロールプレイングゲームなんか
に、こういうのが出^でてくるつけ。体力^{たいりき}回復^{かいふく}
のポーションとか、魔^まよけのアミュレッ
ト、あと、開^あかずの部屋^{へや}のカギとか、なぞ
めいたアイテムがいろいろと……。

想像^{そうぞう}をめぐらしているうち、ばくの右手^{みぎて}
は、勝手^{かって}にふたにのびていた。



まず上半分を、ボタン。それから下半分も、ボタン。

あらわれたのはクリーム色をした正方形のボード。赤い線で縦横九個ずつ、合計八十一個のマスに分けられていて、ぱつと見、将棋盤っぽい。

けれど、それぞれのマスには、1〜81までの小さな数字と、メッセージらしきものが記されている。といって、ふたに彫られたのとよく似た記号がならんでいるだけなので、どんな意味なのかはわからないけれど。

さらに、盤面のお城みたいな絵も描かれていて。

「これ、外国の人生ゲームみたいなものかも、だねえ。ここを見て、だねえ。」

リスのぬいぐるみが開いたふたのうらを指していた。

上ぶたのうらには1〜6の数字のついたルーレット、下のふたのうらには、石を刻んで作ったクマ、リス、ウサギ、ネズミの小さな人形が入っていた。

そうか。動物の人形はコマで、ルーレットをまわして出た数だけ、「1」のマスから進めていくのかも。そして、止まったマスに書かれた指示のとおり、なにかをするとか。

「でも、そうだとすると、ヘビやはしごの絵はなんだと思う？ だねえ。」

こんどはぼくの右手が、ボードを指さした。

そこに、黒い絵の具で、右ななめや左ななめになったヘビやはしが、いくつも描きこまれていた。どれも長さはバラバラで、ヘビの絵は大きさもちがっている。

「ヘビもはしも、はなれたマスとマスをつないでいるように見えるけどねえ。」

「もしかして、はしごを登って、つながった先のマスへいけるのかもだねえ。」

「だったらヘビはなんなの？　だねえ。はしごの代わりにはならないよねえ。」

「みんな上を向いて口を開けてるのは、なにか意味があるのかな？　だねえ。」
見れば見るほど、なぞが増えていく。だったら……。

「ちよつとやってみようか、だねえ。ゲームって、ルールや遊び方の説明を聞くより、とにかく一度ためしてみたほうが早く理解が……。」

つぶやきながら、ぼくの右手がルーレットに近づいていくと。

「むやみにさわるのは、やめたほうがいいねえ！」

左手のぬいぐるみが大声を上げた。

「ルーレットのつまみがドクロになつてるねえ！」

ほんとだ！ どうしていままで気づかなかったんだろう。しかも、ドクロの目に赤い石がうめこまれていて、ぼうつと光を放つてるのが、ぶきみ……。

「それだけじゃないねえ！ ボードの上は、もつとぶきみなことになってるねえ！」

ボードの上？ あ……。

八十一個のマス目の上。そこに描かれていた絵が、変わってゐた。

さつき見たときはあざやかな色で描かれたお城だったはず。それがいま、黒一色で描かれたハエの絵になっている。

ぶつくりとした体に生えた細い毛のようすや、細かい模様の描かれた四枚のうすい翅の模様、大きな複眼まで細かく描かれて、気持ちが悪いほどリアル。

「もしかしたら、これがこのゲームのゴールなのかもしれないねえ。」

「まさか、だねえ。ハエが目標のゲームなんて聞いたことないねえ。」

いいかえすぶくを、左手のぬいぐるみがのぞきこんできた。

「だからって、このゲームが安全っていうことにはならないねえ。」

それから、リスのぬいぐるみは、機関銃のように『だねえ。』を連発しはじめた。

「『ジュマンジ』っていう映画、いつしよに見たの、おぼえてるよね、だねえ。」

「『ジュマンジ2』『ジュマンジ3』、『ザスーラ』っていうのも見たねえ。」

「どれも、軽い気持ちで遊びはじめたら、とんでもないことになるお話だねえ。」

「次々と事件が起きて、命がけでゲームを終わらせなければならなかったねえ。」

「これと同じかもしれないねえ。だから、危険なことはやめたほうがいいねえ。」

ぼくは、こくりとわずくと、ためいきをついた。

「たしかに、きみのいうとおりなのかもしれないねえ。でも、もう遅いねえ。」

カタカタカタカタ。

かわいた音をたてて、ルーレットがまわっていた。

「まわしたおぼえはないんだけどねえ。指が勝手に動いたみたいだねえ……。」

カタカタカタカタ。

軽やかにまわり続けるルーレット。やがて、その回転は遅くなっていき。

カタカタ、カタ、カタ……、カタン。

『3』。



ルーレットが止まった、そのとたん。こんどはボードの上から音がした。

カサカサカサカサ。

いつのまにかボードにあらわれたリスの人形が、スタートの1のマスから右へ動いていった。

2のマス、3のマス、4のマス。

ルーレットに出た数と同じだけ動いたところで、リスの人形が止まった。

「きみ、めずらしいぬいぐるみを持つてるね。」

ぎよつとふりかえると、おじいさんが立っていた。枯れ木みたいに細い体。よれよれのジーンズにしわしわの黒シャツ。肩までのびたざんばら髪はまつ白。

「そのぬいぐるみ、だれにつけられたんだい？」

ぼくもぬいぐるみも声を出せなかった。それは、おじいさんの目が春の空みたいに青くて、高い鼻はカギみたいにまがった外国人で、身なりはみすばらしいのに、なぜか気品を感じさせる、なんともふしぎな人だったからじゃない。

“だれにつけられたんだい？”

そんな質問しつもんをされたのは、初めてはじだったから。

「聞きこえなかったのかな？ インストラクターはだれか、といったんだ。」

インストラクター？ ぼくもぬいぐるみも、ますます頭あたまが混乱こんらんして、目めを白黒しろくろ。

「おいしい、魔力まりよくだけでなく、心こころと声こえまで封印ふういんされたのかね？ そんな強力きやうりきなぬいぐるみがあると、うわさに聞きいたことはあるが……。」

おじいさんは、ひとりごとのようにつぶやいている。

「で、きみはそのぬいぐるみを外はずしたいのかな？ いや、それも聞きくだけむだか……。」

「外はずせるんですか、だねえ。」

とつぜん声こえを出だしたばくに、おじいさんは目めをまんまるにして、飛とびのいた。

「な、なんだ、話はなしはできるのか……。」

おじいさんは胸むねをおさえると、あらためて、ぼくの前まえに立たちはだかった。

「いや、わたしには外はずせんよ。魔力封印まりよくふういんのぬいぐるみは、かんたんに取とれるもんじやないからね。が、外はずしたい気持ちきもちがあるなら、方法ほうほうを見みつけてあげることはできるかも……。」

「あのう……、魔力封印まりよくふういんって、どういうことですか、だねえ。」

「……ああ、やっぱり記憶は封じられているのか。」

おじいさんは、ほうつとためいきをついてから、えへんとせき払いをした。

「きみには魔力があるんだよ。黒魔法使いになれるだけの魔力がね。」

魔力……。黒魔法使い……。

「それを目をつけたインストラクター黒魔法女が、きみを弟子にした。ところが、なにかの理由で黒魔法修行を中止し、きみの魔力をそのぬいぐるみで封印したらしい。」

黒魔法修行……。インストラクター……。

「自分の都合で弟子を見捨てるのは、重大な規則違反なんだが、ときどきいるんだよ、悪いインストラクター黒魔法女が。それを摘発するのが『黒魔法監察官』であるわたしの仕事でね。この『ヘビとはしごゲーム』は、犠牲者を発見し、助けるための道具さ。」

ちよつと、なにをいつてるのか、わからない……。

「ともかく、ぬいぐるみを外したいなら、ゲームを続けることだ。なぜなら……。」

いいかけて、おじいさんは、しわだらけの目で、ぼくの顔をのぞきこんだ。

「そういえば、まだ名前を聞いてなかったな。」

一瞬^{いつしゅん}、迷^{まよ}った。見^みず知^しらずの、それもいきなり「魔力^{まりよく}」とか「黒魔法^{くろまほう}使い^{つか}」とか、おか
しなことをいうおじいさんに名前^{なまえ}なんて教^{おし}えていいのかなって。

でも、それ以上^{いじょう}に知^しりたかつた。

このぬいぐるみを外^{はず}す方法^{ほうほう}を。そして、ふつうの男^{おとこ}の子^こにもどる方法^{ほうほう}を。

「大形^{おおがた}……、大形京^{おおがたまう}、だねえ……。」

「よし、大形^{おおがた}くん。4の「魔^まス」に、なんて書^かいてあるか、読^よんでごらん。」

枯^かれ枝^{えだ}みたいな指^{ゆび}が、リスの人形^{にんぎょう}が止^とまったマスをさしている。

「〈仮^{かり}の魔^ま力^{りよく}をゲットした。黒^{くろ}い未^み来^{らい}が開^{ひら}けた〉だねえ。」

そういつた自分^{じぶん}にびつくりした。だって、さっきまでは意味^い不明^{ふめい}な記号^{きごう}にしか見^みえな
かつたんだ。なのに、なんでいま読^よめたんだらう。

「きみはこのゲームに受^うけ入^いれられたんだよ。というか、これはきみのゲームなのかもし
れんな。」

「ぼくのゲームって、どういうこと、だねえ。」

「さあ、それはゲームを進^{すす}めていけばわかるだらうよ。ま、とにかく……。」

いいながら、おじいさんは、ゲームの入った木箱きばこのふたを、閉とじはじめた。

「これからしばらく、まわりのできごとに注意ちゅういをすることだ。仮かりの魔力まりきを手てにすると、いままでとはちがったものが見えたり、聞きこえたりするだろうからね。四週間しゅうかん後、それについて、ここへ来て話はなしてくれたまえ。その内容ないようによっちゃ……。」

おじいさんは、木箱きばこをわきにかかえて、立たちあがった。

「ぬいぐるみの外はすし方かたがわかるかもしれんよ。」

ぽかんとするぽくとぬいぐるみをよそに、おじいさんは、すたすた公園こうえんを出でていった。

2 “ボッチ”少女の黒いオーラ

つぎ 朝。第一小の昇降口には、元気な声がこだましていた。

「おはよう。」「おはよう！」

ぼくも四年生のとき同じクラスだった子に声をかける。

「おはようだねえ。」

「おはよう。」

とりあえずあいさつは返してくれた。でも、それだけ。

ふつうの子たちは、そのあと、おしゃべりがはじまる。

「聞いてよ。おれき、きのう、レアカード、ゲットしちゃった！」

「うっそ！ なになに？ なんのカード？」

とか、

「ちよつと、奈々。そのまつげ、ビミョーにマスカラつけてない？」

「え、わかるの？ 先生にもバレるかな。でも、これ、けっこうかわいくない？」とか。

けど、ぼくにそれはなし。そもそも、あいさつのときから、ぼくのこと、見てないし。ほうつとためいきをついてから、五年一組の教室へ向かった。うしろの戸口から入ってすぐがぼくの席。腰をおろしながら、となりの席の須々木凜音さんに、声をかける。

「おはようだねえ。」

「おはよう……。」

須々木さんはちらつと目をむけてくれた。けど、その目にはおなじみの光が浮かんではいる。一年生のときから一度として消えたことのない、恐怖におびえるような光が。

「あのおじいさんのいったこと、ウソだったねえ。」

思わずぼくは、ぬいぐるみに話しかけた。

「『いままでとはちがったもの』なんて、見えも聞こえもしないねえ。」

ふつうの声でつぶやいているから、須々木さんはもちろん、近くでおしやべりしている

子たちの耳には届いてるはず。だけど、だれひとり、ぼくをふりかえらない。

四年以上変わらず続く　「みんなに見て見ぬふりをされる、ほぼ透明人間状態」。

「ぼくたち、おじいさんからかわれたんだねえ。」

「あんな人を信じた自分に、腹が立つてくるねえ。」

そういいながらも、ぼくは教室をきよろきよろ見まわすのを、やめられなかった。

なんでもいい。いままでとはちがったものが見えないかな。

きのうまでの世界とはちがったなにかが……。

「あれ？　あの人、なんだか変じやない、だねえ。」

ぼくの目にとまったのは、まんなかの列の前から二番目の女子。いつもとんでもないハ

デハデファッションで、女子の輪のまんなかにいる紫苑さん。

「なのに、今日はひとりで机につつぶしてるねえ。」

元気がない、というか、半分死んでる感じ。といって、病氣つてわけでもなさそう。

「これはおかしいねえ。おじいさんに報告すること、その一かも、だねえ。」

ところが、左手のリスのぬいぐるみが、くるつとぼくをふりかえって。

「あれは、みんなにハブられてるんだねえ。無視されてるってことだねえ。」

なるほど、女子だけじゃなく、男子も紫苑さんを避けてるみたい。でも、なぜ？

「ファッション自慢のしすぎだねえ。あまりのことに、一組を仕切ってる一路さんと春野さんがキレたんだねえ。でも、ほかのクラスでも、きつとそうなってたかもねえ。」

ほかのクラスでも？ それじゃあ、こういうの、別にめずらしいことじゃない？

「ハブったりハブられたりは、いいことじゃないけど、小学校あるあるだねえ。児童文学でも、むかしから定番のネタだねえ。」

そうか……。じゃあ、やつぱり、変わったことはなにもないってことか……。と、そこへ担任の先生が入ってきた。自称熱血イケメン教師の松岡祐造先生。

「やあやあ、五年一組の諸君！ 今日一発、元気に……。」

けさも意味不明の暑苦しいあいさつをしかけたとき、女子がひとり、先生のわきをすりぬけるようにして教室に飛びこんできた。そして、そのまま、なにこともなかったように教卓のまん前の席におさまると、松岡先生がにんまりと笑って。

「おう、チョコ。すべりこみセーフってやつだな。」

チヨコ、ちよこ、千代子……。そうだ、『黒鳥千代子』さん。

五年生で初めて同じクラスになった人だけど、ちよつと変わってるんだよね。

おかっぱ頭に、黒のTシャツ、オーバーオール。紫苑さんとは正反對の、おしやれつ気ゼロ。朝は遅刻ぎりぎり。帰りの会が終わったときにはけむりのように消えている。休み時間もたいてい、姿なし。たとえ教室にのこっていても、ひとりで読書。

まる一日、だれかと話すことはなく、ずつと「ボツチ」。

といって、ハズられてゐるわけでもなく、むしろ、自分から「寄るなさわるな近づくな」オーラを出してる感じ。いまでも、熱い視線を送る左の席の男子を、完全無視。ぼくが透明人間あつかいされているとしたら、黒鳥さんは、すすんで透明人間になろう

としてゐるみたいで。

「あ、でも……、だねえ。」

リスのぬいぐるみが声をひそめたのは、いつのまにか授業がはじまっていたからで。

「今日の黒鳥さん、体がぼうつと光ってない？ だねえ。」

たしかに。体がぼんやりとうすい光の膜につつまれてる。

じゃ、あれが「寄るなさわるな近づくな」オーラ？ オーラって目に見えるんだ……。

「でもオーラって、もっとキラキラしてるのかと思つたねえ。」

「ほんとだねえ。黒鳥さんのは、どす黒くて、ぶきみだねえ。」

ひそひそ声で会話をしていると、ぬいぐるみがまた、あつと声を上げた。

「紫苑さんが、黒鳥さんの背中をたたいてるねえ。」

ほんとだ。それになにか手わたしてる。授業をしている先生にはわからないようにして

るけど、うしろからだ、そのようすが丸見え。

「手紙をまわしてるんだねえ。女子がよく授業中にやるやつだねえ。」

「あ、手紙を受けとつた黒鳥さんの背中に、男子がなにか投げたねえ。」

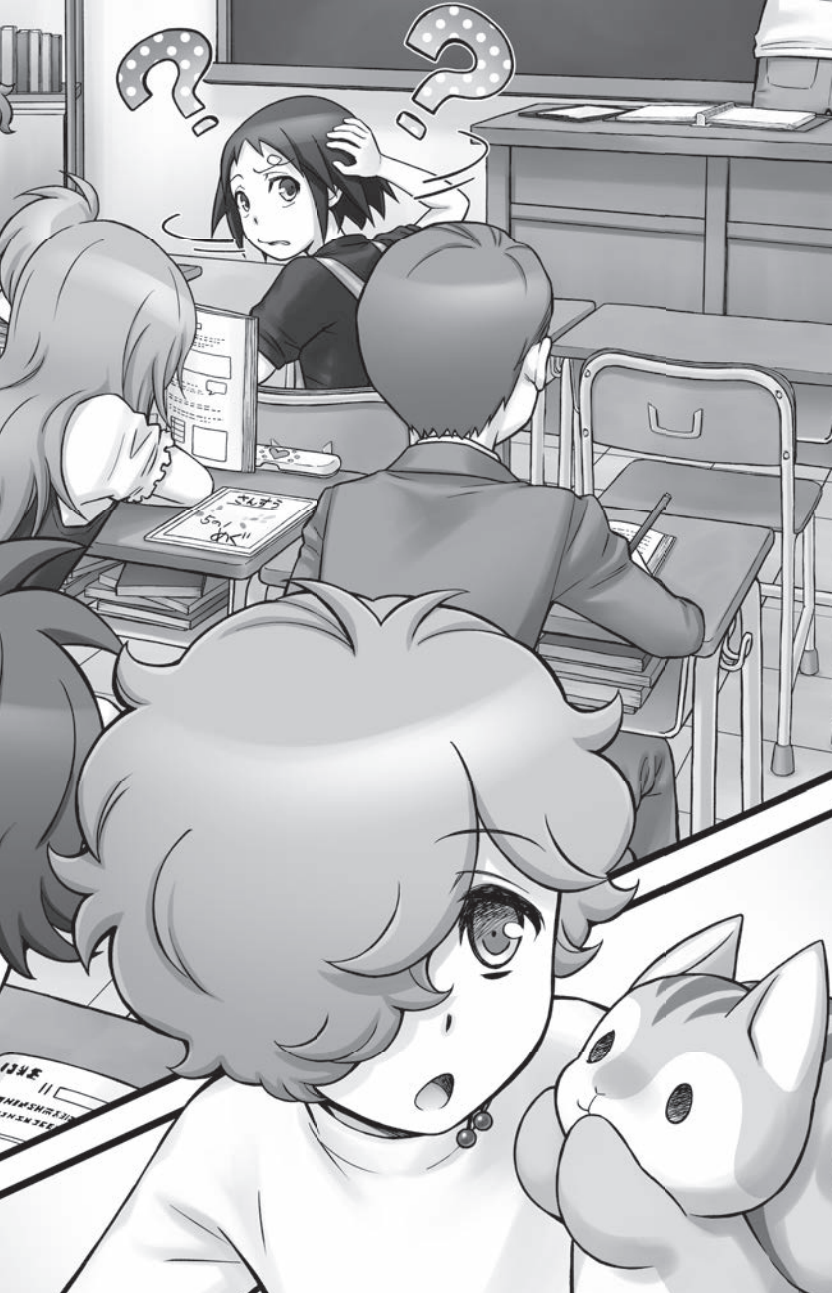
「消しゴムだねえ。投げてるのは岩田くん、あと、小島くんもだねえ。」

それって、紫苑さんをかまうなつていう警告？ みんなでハブにしてるんだから、じゃ

まするなつて？ うーん、いくらなんでも、それはやりすぎじゃない？

にしても、黒鳥さん、どうするんだろ。おとといときのうの二日間を見ているかぎり、

こういうことには、ぜつたに関わり合いにならないタイプだと思っただけ。



「あれ？　だねえ。いま、黒鳥さんのどす黒いオーラ、ぼわんと強く光ったねえ。」

しかも、その輝きはどんどん強くなつていく！

「みんなは気がつかないのかな？　だねえ。それとも、これも無視？　だねえ。」

でも、黒鳥さんから、強烈な黒いオーラが放たれているのはまちがいない。

これ、黒鳥さん、怒つてゐること？　まさか紫苑さんのために戦うつもりとか？

「とにかく、これこそ『いままでとはちがつたもの』じゃないかな、だねえ！」

……ところが、そのあと、なにも起こらなかった。

中休みも昼休みも、黒鳥さんはいつものようにどこかに消え、紫苑さんはひとりで机に

つつぶしたまま。結局、二人は言葉を交わすことさえなく、その日は終わり。

「やつぱり、すべて、いままでと同じだったねえ。」

「オーラが見えただなんて、ただの幻だったねえ。」

ぼくは肩を落として、下校するほかなかった。



ところが次の日。

登校すると、教室のまんなかには、いつものように女子たちが集まっていたんだけど。

「……トップスは SUPER LOVERS。このあいだラフォーレ原宿いったときに買ったの。」

うそ！ 輪のなかで、紫苑さんがいつものファッション自慢してる！

きのうは完全に村八分状態だったのに、もう元にもどったわけ？

「別に、元にもどったわけじゃないねえ。」

リスのぬいぐるみがさきやいてきた。

「一路さんと春野さんが、やけにおとなしいねえ。」

いわれて、びつくり。きのう紫苑さんをクラス全体からハブにしたはずの二人が、今日は輪の外で、ビミョーな顔で立ちつくしてる。

つまり、たった一日で、一路さん、春野さん、紫苑さんの関係が逆転したってこと。

いったい、この三人になにがあつたんだ!?

「そういえば、おととい、飛行機公園のそばで、三人を見かけたよねえ。」

そうだ。あのとき、三人は激しく言い争ってたつけ。で、紫苑さんがいったんだよ。

『もう、けんかはやめよお。チョコに占つてもらえばすむことなんだからあゝ。』

チヨコ……。

教卓きょうたくの前の席せきに目をむけると、黒鳥くろとりさんがいた。その姿すがたは光ひかりの膜まくにつつまれている。

オーは幻まぼろしじゃなかった。それどころか、黒光くろびかりがさらに強つよくなってる……。

考かんがえてみれば、遅刻ちこくぎりぎりじゃない登校とうこうは、新学しんが期つきになつて今日きょうが初はじめてだし。

もしや、紫苑しおんさんの村八分むらばちぶじょうたい状態かいしやうが解消かいしょうされたのには、黒鳥くろとりさんが関係かんけいしてるとか？

結局けつぎよく、この日もそれ以上いじょうおかしなことは起おこらなかった。それでも、きのうの帰かえり道みちと

は、気分きぶんがぜんぜんちがった。

「なにかが動うごきだすのかもだねえ。ただのカンだけど、そんな気きがしてきたねえ！」

「うん、だねえ。こんどこそ思おもいがけないことが起おきそうで、わくわくするねえ！」



ぼくとぬいぐるみのカンは、さつそく当あたった！

新学しんが期つき最さい初しよの土曜どようをいきなり登校とうこう日にされたことも思おもいもよらなかつたけど、さらに五

年ねん一組くみでは異常いじような事じ態たいが發はつ生せいしたんだ。それも次々つぎつぎと！

・異常いじよう事じ態たいその一…紫苑しおんさんと黒鳥くろとりさんが、連つれだつて登校とうこうしてきた。

・異常事態その二…女子全員が紫苑さん、さらに黒鳥さんまでも、とりかこんだ。しかも、一路さんと春野さんは、いかにも心配そうに紫苑さんの顔をのぞきこんで。

「だいじようぶ、メグ？ こわいこと、起こらなかった？」

「それが、死体はおどつてるし、人面犬はいるし、もう超常現象の連続で……。」

死体がおどる？ 人面犬？ 超常現象!?

「でも、チョコがいつしよだったから、だいじようぶだったけど。」

黒鳥さんがいつしよなら、超常現象が起きても平気？

次々と飛びだす思いもよらないワードに、ぼくの胸はどきどき。

と、そこで、ついに特大サイズの異常事態が発生！

一路さん、ひどく思いつめたような顔で黒鳥さんに近づいたかと思うと。

「黒鳥さん、あなたにお願いがあるの。あなた、『怪奇現象究明委員会』の委員長になつ

てくださらない？」

怪奇現象究明委員会!!

「紫苑さんから聞いたと思うけど、最近、一組の人たちが、怪しい現象に出合っている

の。それで、やつぱりこういうことは、黒鳥さんがくわしいと思うのよね。」

黒鳥さんは怪奇現象にくわしい？ それに一路さんは、なぜそんなこと、知ってるの？

「チョコちゃん、お願い。学校の怪談がほんとに起きるなんて、あたしこわくて！」

春野さんまで、グーにした両手をあごにあてたブリつ子ポーズで、渾身のお願い。

「ああ、なんていう展開、だねえ。目まいがしてくるねえ。」

リスのぬいぐるみが、まっ黒な目をぐるぐる。

でも、それで終わりじゃなかった。続く授業では松岡先生が、いじめをうったえる岩田くんをさらにイジツたり、漢字テストで0点をとった紫苑さんをからかったりと、教師にあるまじき行動をとったことで、一組は大混乱に！

そして、黒鳥さんのオーラが輝きだした。

きのうより強く、黒曜石のようなきらめきを放ちながら。

「こんどこそ、本格的におかしなことがはじまったねえ！」

左手のぬいぐるみにむかつて、ぼくはつぶやいた。

「黒鳥さんは、かならず動くねえ。」

「問題^{もんだい}は、いつ、どこで、だねえ。」
それから帰^{かえ}りの会^{かい}まで、ぼくたちは、そのことばかり考^{かん}え^がていた。

3 目撃！ ほんものの『学校の怪談』！

その日の夜。ぼくは校門近くに立つ電柱のかげにかくれていた。

「ううつ、寒くなってきたねえ。」

リスのぬいぐるみがふるえている。

「四月でも、夜は十度ぐらいまで下がるんだってねえ。知ってたら、寒いのが平気なクマくんにかわってもらってたねえ。」

でも、そんなグチ、ぼくは無視。ただ、じつと校門を見つめ、じりじりしていた。

なぜ黒鳥さんは来ない？ ぼくの予想がまちがっていた？ いや、『怪奇現象究明委員会』

の委員長として、学校の怪談騒ぎをなんとかするつもりなら、場所は学校。そして、昼間、なんの動きも見せなかった以上、行動は夜のはず。

そう考えたからこそ、生まれて初めてお母さんにうそをついてまで、ここへ来たのに。

『岩田^{いわた}くん、塾^{じゅく}の体験^{たいけん}入学^{にゅうがく}につきあつてほしいって言^いわれたんだけど、行^いつてもいいかな、だねえ。受験^{じゅけん}クラスだから帰^{かえ}りは夜^{よる}になるけど、だねえ。』

学校^{がっこう}から帰^{かえ}つてそういつたとき、お母^{かあ}さんの目^めは点^{てん}になった。それで、まずいつて思^{おも}つたんだ。ウソがばれたかもつて。岩田^{いわた}くんは中学^{ちゅうがく}入試^{にゅうし}をするタイプには見^みえないし、速水^{はやみ}瑛良^{あきら}くんとか与那国^{よなぐに}治樹^{ちはるぎ}くんとか、勉強^{べんきょう}ができそうな人^{ひと}の名前^{なまえ}を出^だすべきだった……。

でも五秒^{びようび}後^ご、お母^{かあ}さんは目^めをうるうるさせると、やがて輝^{かがや}くような笑顔^{えがほ}に。

『も、もちろん！ いってらつしやい！』

それから、こんどはスマホ^てを手^てにして。

『あ、あなた？ 聞^きいて！ 京^{きょう}にお友^{とも}だちができたみたいなの！ 塾^{じゅく}にいつしよに行^いつてくれないかつて、誘^{さそ}われたつて……。』

お父^{とう}さんにまくしたてるお母^{かあ}さんの目^めから、涙^{なみだ}がぼろぼろこぼれていた。

あんな姿^{すがた}を見^みたら、二度^{にど}とうそはつけない。だから、なんとしても、今夜^{こんや}、黒鳥^{くろとり}さんには来^きてもらわないと。でも……。

「もう八時^じだねえ。あんまりおそくなると、ほんとにお母^{かあ}さんにうそがばれるねえ。」

リスのぬいぐるみが、校舎にかかったまゝい時計を見上げてゐる。

しょうがない、今夜はあきらめようか……。

そのとき、ぬいぐるみの耳がぴくつと動いた。

「だれか、来たねえ！」

あわてて電柱から顔だけ出すと、なるほど、人影がふたつ、こっちに近づいてくる。髪型のシルエツトからして女子っぽい。ふつうの背たけの子と背の低い子。

そして、ちびっ子のほうは、全身からほのかな光を放っている。

「あれは黒鳥さんだねえ！　そして、もうひとりとは紫苑さ……。」

あわてて、ぬいぐるみの口をふさぐ。と同時に、目の前を二人が通りすぎていった。

肌寒い夜だというのに、紫苑さんは半そでシャツにミニスカート。一方、黒鳥さんはぶ

あつい黒革コート。それも大人ものなのか、見るからにぶかぶかのオーバーサイズ。

なんともアンバランスな二人組は、まっすぐ校門にむかつていく。そして、そのまま、

あたりまえのように校門を開いて、校内へ……。

って、そんなバカな！　夜の学校は機械警備になつて、無理にしのびこめば、アラーム

が鳴りひびくはず。なのに、いったいどうして……。

「ぼうつとしてゐる場合じゃないねえ。あとを追わないとだめだねえ。」

ぬいぐるみのささやきに、あわてて電柱のかけから飛びだした。そして、黒鳥さんたちが校舎のなかへ入っていくのをたしかめ、少し時間をおいてから、あとに続く。

ひたひたひた……。ひたひたひた……。

リノリウムの床をふむ足音を追って、階段の下へ。見上げると、ほのかな非常灯の光のなかに、二階へむかう二人のうしろ姿が浮かんではいる。ぼくも階段を上がっていくと、二人はさらに三階へ。と、なぜだか急に紫苑さんが階段の段数を数えはじめた。

「一、二、三……。」

階段の窓からのぞく満月が、おどり場の床に窓わくの影を落としている。

あれ？ その四角い光のなかを、いま、人影がひとつ、すーつとよぎったような……。

まんまるの頭。ふくつとした胴体。紫苑さんの影でも黒鳥さんのでもない。体の大きな、たぶん男子の影。どこことなく、五年一組のだれかに似ているような気も……。

「十二、十三、十四。上りが十四段。だけど、下つてみると……。」

「紫苑しおんさんが下りてくるねえ！」

ぬいぐるみのさきやきに、ぼくもあわてて階段かいだんをかけおり、身をかくす。

そんなぼくに気づかず、紫苑しおんさんは二階かいまで下りきると、ひきつった声こえを上げた。

「十一、十二、十三！ ほらあ、一段だんたりないっ！」

それから、黒鳥くろとりさんにむかつて、体をふるわせながら訴うえた。

「で、でも、わかったでしよ。怪奇現象かいきげんしやうが起きるつての、うそじゃないつて。つぎは、三

階かいの女子便所じよしべんじよ！」

そういつて、また階段かいだんをかけあがる二人ふたりに、ぬいぐるみがくすつと笑わらった。

「上のぼるときと下くだるときとで、段数だんすうが変わる階段かいだんは、学校がっこうの怪談かいだんの定番ていばんだねえ。」

けれど、ぼくはおどりの場ばの影かげのほうが気きになった。なぜつて、そこへ行いつてみても、人ひと影かげどころか、だれかがいた気配けはいすらなかったから。あるのは床ゆかに落ちた四角しかくい窓まどの光ひかりだけ。

どういうこと？ だれかが通りすぎるのを、たしかに見みたと思おもったんだけど……。

とはいえ、いまは黒鳥くろとりさんたちを追おいかけようと、三階がいへ上あがってみると。

「わ、わかった。でも、早く来きてよ。」

紫苑しおんさんが、女子便所じょしべんじょのなかへ声をかけていた。どうやら、黒鳥くわとりさんはなかにいるらしい。ところが、そのあと紫苑しおんさんは、ひとりで暗い廊下ろうかを奥おくへ。

「なぜに急に単独行動たんどうこうどうなの？ だねえ。で、どっちをマークするの？ だねえ。」

「決きまつてるねえ。黒いオーラを放はなつ『怪奇現象究明委員会かいきげんしょうめいいいんかい』の委員長いいんちやうだねえ。」

そういつてぼくは、女子便所じょしべんじょの入り口いぐちへ、そろそろと近づいていくと……。

「ルキウゲ・ルキウゲ・リヴェエーレ。」

女子便所じょしべんじょの奥おくから、低く、くぐもった声こえが聞こえた。

「ルキウゲ・ルキウゲ・リヴェエーレ。」

これ、黒鳥くわとりさんの声こえだ。なんていつてるんだろ。魔法まほうの呪文じゅもんみたいなのに聞こえるけど。

「ルキウゲ・ルキウゲ・リヴェエーレ。」

三回目さいがいめの「呪文じゅもん」が聞こえたとき、「きやつ！」と黒鳥くわとりさんの悲鳴ひめいが上がった。と同時に、

女子便所じょしべんじょからまっ黒な影かげが飛びだしてきた。大きくてまんまるの頭あたま。ぷくつと太ふとった体からだ。

「さつき、階段かいだんのおどり場の床ゆかに映うつつたのと、同じ人影おなひとかげだねえ……。」「

あつけにとられていると、こんどは黒鳥くわとりさんが飛びだしてきた。黒鳥くわとりさんは、ぶかぶか

の黒革くろかわコートをぎしぎしいわせながら、太ふとった影かげを追おいかけていく。

影かげも黒鳥くろとりさんも、むかつたのは、さつき紫苑しおんさんが歩あるいていったほう。ばくもそのあとを追おいかけると、暗くらい廊下ろうかの奥おくに、こうこうと白い光しろ ひかりがとる部屋へやがあらわれた。

あれは音楽室おんがくしつ。じゃあ、紫苑しおんさんと黒鳥くろとりさんはこのなかに？ あの子だんしの影かげも？

そつと近づちかいて、戸とにあいたガラス窓まどから、音楽室おんがくしつをのぞきこもうとしたとき。

「あれ？ 音楽室おんがくしつの電気でんきがつけっぱなしだよ。」

松岡先生まつおかせんせい？ でも、どうしてこんな時間じかんに？ って、とにかくくれないきや……。

ところが廊下ろうかにそんな場所ばしょはなし。壁かべぎわの暗くらがりになやがみこんで、体からだをまるめて、息いきを殺ころすことぐらいしかできず。でも、それで十分じゅうぶんだった。へらへらしている先生せんせいは、すぐ足あしもとにいるばくに気づくこともなく、ガラガラツと音楽室おんがくしつの戸とを開ひらいて。

「なんだよ。消けしわすれだよ。まったく、音楽おんがくの吉田先生よしだせんせいはだらしなくていけないよ。」

そういつて、明あかりのスイッチを切きったその瞬間しゅんかん。

ポロン、ポロン。

ん？ ピアノの音おと？

ポロン、ポロロポロン。

まっ暗くらな音楽室おんがくしつにゆったりと、そして、悲かなしげな調しらべが響ひびきわたる。

「だ、だれだ！ こんな時間じかんに学校がっこうにきてピアノをひくなんて……。」

声こえをふるわせながら、先生せんせいが懐中電灯かいちゆうでんとうをむける。ゆれる光ひかりの輪わのなかに浮うかび上あがったのは、ピアノと男おとこの人ひと。四角しかくい顔かお、ぎよろりとした目め。くるつとカールした髪かみをゆらし、歯はを食くいしぼりながら、ピアノを弾ひいている。

「あれはベートーベンだねえ。」

だれにいうとでもなく、ぼくはつぶやいた。なぜわかったかというと、音楽室おんがくしつのかべを見たから。そこには、バッハやモーツァルト、ハイドンの肖像画しょうざうが貼はられている。

けれど、いま、ベートーベンの絵えのところだけ、まっ白しろ……。

「よる夜の音楽室おんがくしつで肖像画しょうざうからぬけだすベートーベン」。これも学校がっこうの怪談かいだんの定番ていばんだねえ。」

でも、そのあとに起おこったことは怪談かいだんのレベルを超こえていた。

「悲かなしい調しらべだ。」

ベートーベンがしゃべった。ドイツ人じんなのに日本語にほんごで。

「人に傷つけられた者のうめき。心をふみつけられた者のさけび。」

ポロン、ポロロン。

「おまえに聞かせているのだ。」

ベートーベンにぎよる目でにらまれて、松岡先生は立ちつくすばかり。

「ひ、ひい……。ふお、ふおくがにやにを……。」

「まだ、わからぬか！」

ギャン、と、鍵盤をめちやくちやにたたく音がした。

「それなら、わかるまで、おまえにとりついてやるつ。」

立ちあがったベートーベンが、宙をすべるように先生に近づいていく。

「ぎやああ！ た、助けてえ！」

懐中電灯を放りだした先生は、ころがるように音楽室を飛びだしていく。

ぼくの左手でも、リスのぬいぐるみが恐怖でふるえあがっている。

でも、ぼくの右手はそれをそつとおさえると、壁を指さした。

「心配ないねえ。ベートーベン先生をおどかしたただけだねえ。」

さつき白い紙しろうかみだったところに、ちゃんとベーターベンがもどつていた。
ざまあみろ、みたいな、いたずらつ子こそうな笑えみを浮うかべて。

「だ、だけど、これはほんものの心霊現象しんれいげんじょうなんでしょ、だねえ。」

そう！ すべてほんものの霊れい！ こんなオカルト現象げんじょう、生うまれて初めて見みたよ！

だけど、少しもこわくなかった。その正反对せいはんたい。わくわく&大興奮アンドだいこうふん！

だって、あのおじいさんのいうとおりだったんだもの！

これなんだよ！ これこそが “いままでとはちがつたもの” なんだ！

だから、もつとよく見みなきや！ そして、くわしくおじいさんに報告ほうこくしなくちや！

ぼくは胸むねをおどらせながら、はいつくばるようにして逃にげる先生せんせいのあとを、いや、先生せんせいを追おう黒鳥くろとりさんたちのあとを追おいかけた。

すると、黒鳥くろとりさんたちは、またさつきの女子便所じょしべんじょの入り口ぐちに立たって、なかのようすをのぞいていた。どうやら、松岡先生まつおかせんせいはそこへかけこんだらしい。

「この学校がっこうの心霊現象しんれいげんじょう、なにかと女子便所じょしべんじょが舞台ぶたいになりがち、だねえ。」

うん……。なにか、ぼくの知らない理由りゆうがあるのかも……。

バーン！

とつぜん、校舎じゆうにひびきわたる大きな音がした。それから。

「た、助けてくれーっ。」

松岡先生が女子便所を飛びだしてきた。それを追つて、また、太った男子の影が飛びだしてきた。それが目の前を通りすぎた瞬間、興奮と恐怖で、ぼくの全身の毛が逆立った。遠かったり、あたりが暗かったりして、姿形がはつきり見えない人影も、近づけば人の姿になり、目も鼻も、腕も脚も見えるはず。だけど、いまのはちがった。手が届くほど近くにて、かけぬけたときには空気の乱れさえ感じた。なのに、なにも見えなかった。あれは影じゃない。人の形をした黒いかたまり。つまり、霊……。

ぼくと同じものを見たのか、紫苑さんもへなへなとへたりこんでいた。でも、黒鳥さんは、あいかわらず興味津々の顔で、松岡先生と黒い霊がむかつた階段を見おろしている。そこからは先生の悲鳴、そして、それを脅すような男の子の声が聞こえてきて。

「わ、悪かった、あ、あやまる、ご、ごめん……。」「

「ごめんですめば、警察はいりませんよ、先生。」

あの声は岩田くん？　そうか、肉まんみたいにまるいりんかくに見おぼえがあると思つたのは、岩田くんのシルエツトだったからか。

「じゃ、あれは岩田くんの霊？　だねえ。あ、死んでないから生き霊か、だねえ。」
前にこわい話の本で読んだことがある。強いうらみを持った人の霊は、本人の知らないうちに、生き霊となつて体をぬけだして、相手に祟ることがあるつて。

そうか、わかつたぞ。今日、いじめを訴えた岩田くんを、松岡先生は助けるどころか、よけいにからかつたつて。それで、岩田くんの生き霊が先生を襲つてゐるんだ。

それにしても、ごめんですめば警察はいらない。つていうことは……

「岩田くんの生き霊は、先生の命までとるつもりなのか、だねえ。」
いや、それはまずいでしょ。黒鳥さん、どうするつもりなんだろ。

「た、助けてくれっ！」

先生の悲鳴がいちだんと大きくなつた。と同時に、黒鳥さんにむかつて、松岡先生の手がのびるのが見えた。つまり、先生は黒鳥さんに助けを求めてゐること。

でも、その手は、黒革コートをつかみかけたところで、つるつとすべつて。

「あーっ！」

どたどたと音をたてて、先生の体は暗い階段の底へころげ落ちていく。

「ルキウゲ・ルキウゲ・リトラッターレ。」

あ、また、呪文？ でも……。いまの声、黒鳥さんじゃない。

だって、黒鳥さんは階段の上。だけど、声は下から聞こえた。

それに声も、低くて、ちよつとハスキーで、大人の女の人の声だったような。

あ、黒鳥さんが階段を下りていく。

ぼくはあわてて、黒鳥さんがいた場所へかけよつた。で、下に目をむけると……。

ごわごわの黒革のコートが見えた。でも、黒鳥さんじゃない。だって、身長は百八十セ

ンチをはるかに超えていそうだし。暗くて顔は見えないけれど、フードの下から、黄色い

目が二つ、ぼうつと光っている。

つまり、それは、おそろいのコートを着た別人。というか、怪人って感じ……。

そんなぶきみな人影が、また、ハスキーな声を上げた。

「ルキウゲ・ルキウゲ・リトラッターレ。」

消えた。黒光りしていた岩田くんの生き霊が消えた。

まるで、ろうそくの炎を吹き消すように、ふつと……。

「で、もう、だいじょうぶなの？」

ええっ？ 黒鳥さんが、なぞの怪人と話してる？ それも、とても親しそうに！

「生き霊の回収呪文をとなえたからな。ついでにハデハデ女の記憶も消しといてやった。」

なぞの怪人も姿に似合わず、やさしい声。

「……おまえも、デビューにしちゃ、よくやったよ。……まあ、合格……。あほ、バカ、

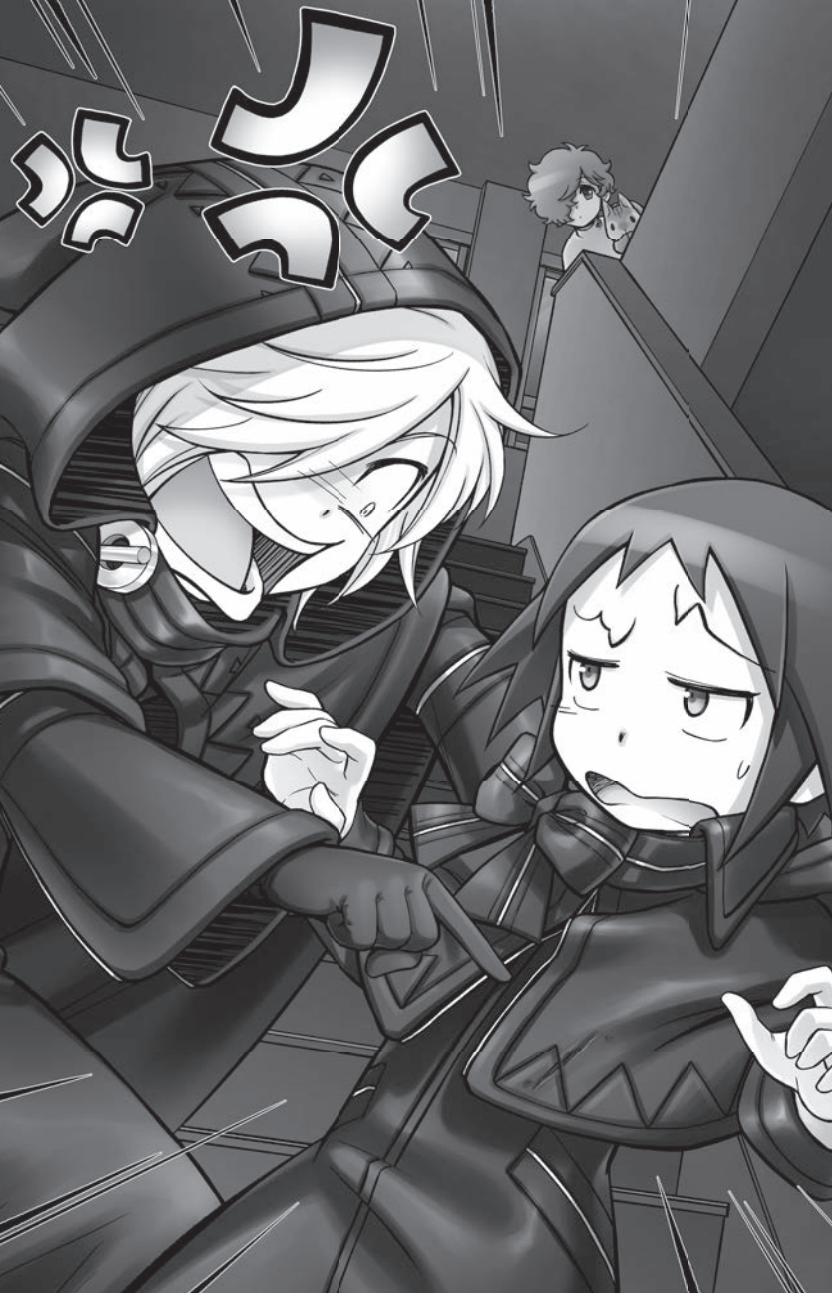
ぼけ、まぬけ、おたんこなす、すつとこどっこい！」

うわっ！ なぞの怪人が、いきなりどなった！

「どうしてくれるんだよ！」

なぞの怪人は、黒鳥さんが着ている黒革のコートを指さしている。そこは、さつき松岡先生がしがみついたところ。どうやら、先生の爪で革にひっかかり傷がついたことを怒ってるらしい。

「どうするって、しょうがないじゃない。黒魔術を使えば、こういうこともあるよ。」



うそ。黒鳥さん、ふつうにいいかえしてる。でも、黒魔術を使えば、つて……。

「な、なまいきいうな！ 低級魔女のくせにい！ 弁償しろ、弁償！」

「ええっ！ そ、そんなの無理だよ。」

「無理でもなんでも、弁償だあ！」

なぞの怪人は、弁償だ、弁償だ、とさけびながら階段を下りていく。でも、そのうしろ姿を黒鳥さんはあきれ顔で見送るだけ。やがて、へたりこんだ紫苑さんの腕をとって。

「さあ、メグ。ぜんぶ終わったから、帰ろ。」

階段を下りていく黒鳥さんの顔に、ぼくもリスのぬいぐるみも、がくぜんとした。黒鳥さんがほほえんでいた。

ふだんの教室のすがたからは想像すらできない、晴れ晴れとしたほほえみだった。

4 見知らぬ森の怪しい洋館

五月六日。ゴールデンウィーク明けの水曜日。

そして、待ちに待った、なぞのおじいさんと再会を約束した日。

帰りの会が終わるとすぐ、ぼくは教室を飛びだした。それも、黒鳥さんより早く！

ああ、早く話したい！

この四週間に起きた、とびきりの「いままでとはちがつたもの」を伝えたい！

あんまりわくわくして、全力疾走したもんだから、飛行機公園にかけこんだときには、

息はゼイゼイ、心臓もバクバク。でも、身なりのみすばらしい、でもどこか気品のある、

枯れ木のような背中が見えた瞬間、息苦しさなんてふつとんでしまい。

「ねえ、聞いて、聞いて、だねえ！」

おじいさんがふりかえるよりも早く、ぼくは猛然とまくしたてていた。

夜の学校でほんものの学校の怪談を目にしたこと。上るときと下るときで段数がちがう階段。肖像画からぬけだしたベートーベン。女子便所から飛びだしてきた生き霊。

「しかも、その正体は同じクラスの岩田くんだったんだねえ！」

「担任の先生に、うらみをはらそうと幽体離脱したんだねえ！」

ぼくに圧倒されたのか、おじいさんはだまって耳をかたむけていたけれど。

「ところが、その生き霊を黒魔女が消しちやったんだねえ！」

そのとたん、落ちくぼんだ目がまんまるに。

「黒魔女？ き、きみは黒魔女を見たのか!？」

「うん、だねえ。『ルキウゲ・ルキウゲ・なんとかく。』って変な呪文を唱えてたねえ。」

「『生き霊の回収呪文』らしいねえ。ほかにも、黒魔術を使った、っていったねえ。」

しわだらけの顔が、興奮でみるみるまっ赤になつていく。

そういえば、この人、自分のことを『黒魔女監察官』だって、いってたつけ。だから、

『黒魔女』って聞いて、おどろいたんだ。だったら、もつとおどかしてやろう！

「あれは、おじいさんがいつてた『インストラクター黒魔女』だと思うねえ。」

「なんだって！ ど、どうしてわかる？」

「いっしょにいた人に、『デビュー』とか『合格』とかいってたねえ。」

「それって、弟子に黒魔女修行をさせてるってことでしょ？ だねえ。」

「弟子？ それは人間の子か？」

「うん、だねえ。同じ五年一組の黒鳥千代子さんだねえ。」

あつけにとられるおじいさんに、ぼくはそのときの二人のようすについて話した。

インストラクター黒魔女は、すらつとスタイルがよくて、身長は百八十センチメートル

以上。ハスキーな声で、やさしく話していたかと思えば、急に『あほ。』とか『すつとこ

どつこい。』とか、機関銃みたいにまくしたてたりして、ヤンキーみたいだと思つたこと。

でも、黒鳥さんは平気でいいかえしたりして、友だちみたいだつたこと。実際、二人は

なかよく、おそろいの黒革コートを着ていたこと……。

「で、怪談事件のあと、黒鳥さんの家を見はつたねえ。」

「そしたら、紫苑メグさんが来て、二人で出かけたねえ。」

しかも、出かけたとき、黒鳥さんはTシャツとオーバーオールのジーンズ姿だったの

に、帰^{かえ}ってきたときは、黒^{くろ}と赤^{あか}のひらひらのゴスロリを着^きてた！

「あ、ゴスロリっていうのは、日本^{にっぽん}独特^{どくとく}のファッションで……。」

「それは知^しつとる。それより、その弟子^{でし}は次の日^{つぎ ひ}からゴスロリを魔^ま女^{じよ}服^{ふく}にしたんだな？」
魔^ま女^{じよ}服^{ふく}？ ああ、黒^{くろ}魔^ま女^{じよ}のコスチュームのことを、そう呼^よぶんだね。

「それがちがうんだねえ。そのあとしばらくは、いつもの黒^{くろ}鳥^{とり}さんだったねえ。」

ティ T シャツにオーバーオール。ぼさぼさ頭^{あたま}で遅^ち刻^{こく}ぎりぎりに登^{とう}校^{こう}、ダッシュで下^げ校^{こう}。まわ

りの人^{ひと}にもできごとにも、関^{かん}心^{しん}ゼロ。ただただ、ボツチを貫^{つらぬ}く毎日^{まいにち}。

変^{へん}化^かがあらわれたのは約^{やく}二週^{しゅう}間^{かん}後^ご。四月^{がつ}二十七日^{にち}のことだった。

「一組^{くみ}にすごい美人^{びじん}が転^{てん}校^{こう}してきて、男子^{だんし}が全^{ぜん}員^{いん}、クラクラしちゃったんだねえ。」

「だけど、ちつともクラスになじもうとしないんで、女子^{じよし}とは対^{たい}立^{りつ}したんだねえ。」

黒^{くろ}鳥^{とり}さんはそのようすをビミョーな目^めで、じつと見^みてたつけ。

で、次の日^{つぎ ひ}の放^{ほう}課^か後^ご、いつものように黒^{くろ}鳥^{とり}さんの家^{いえ}のようすをうかがっていたら。

「夕方^{ゆうがた}、黒^{くろ}鳥^{とり}さんが出てきたんだねえ。しかも、ゴスロリを着^きてたねえ！」

「例^{れい}のヤンキーっぽいインストラクター黒^{くろ}魔^ま女^{じよ}も、いっしょだったねえ！」

なかよく肩をならべて歩きだした二人。もちろん、ぼくはそのあとを追った。

正確には、もうひとり、同じクラスの麻倉良太郎くんも尾行していたんだけど、そのこ

とは、おじいさんに話さなかった。だって、黒魔女とは関係ないってわかってたから。

麻倉くんは黒鳥さんのことを、いつもじとつとした目で見てるし、尾行も「好き」の気持ち

持ちがつのりすぎただけ。それを他人にいいふらすなんて、かわいそうなもの。

「黒鳥さんたちがむかつたのは、大円寺の墓地だねえ。大円寺っていうのは……。」

「それも知っている！ それより、そこで見たことを話さない！」

いらいらするおじいさんに、リスのぬいぐるみが目をぱちくり。

「う、うん、だねえ。ぼくが見たのは『いけにえの儀式』だねえ。」

「羅門ルルっていう名前の転校生さん、実は死霊だったんだねえ。」

あとの話は、いちいち「だねえ」がついて、自分でも長いと思ったのでまとめると。

一 羅門さんは黒魔女になるため、一組の男子をいけにえにするつもりだった。

二 羅門さんをいじめていた女子二人も、ついでにいけにえ候補にくわえられた。

三 やがて、牛のような巨大で黒い化け物が、いけにえを受けとりにあらわれた。

「そこへヤンキー黒魔女くろまじよが出てでいつて、あ、名前はギュービッドなまえつていうんだけど、今日きょうだけは、いけにえを受けうけるのはやめてほしいつて、威勢いせいのいいところを見みせたねえ。」

ところが、ヤンキー黒魔女くろまじよは、牛うしの化け物ばものの顔かおを見みたとたん、なぜだか急にきゅう元氣げんきをなくしてしまひ。そして、それはまた、牛うしの化け物ばもののほうも同じおなじで。

「それで、こんどは黒鳥くろとりさんが飛とびだして、巨大きょだいな牛男うしおとこにかみついたんだねえ！」

そこで黒鳥くろとりさんがいったのは、人間にんげんをいけにえにするのは、今回こんかいだけじゃなくて、永久えいきゅうにやめろつてこと。しかも、ヤンキー黒魔女くろまじよが、そんな口くちのきき方かたをするなつて、止とめに入はいつても、黒鳥くろとりさんは、そんなこと知しるかつて、いいはなつたんだ。

「あれは、かつこよかつたねえ！」

黒魔女くろまじよになりそこねた羅門らもんさんに『いつかかならず、おまえをたおしてやるから。』つていわれても、それがどうした、みたいな、すずしい顔かお。

羅門らもんさんが絵本えほんの魔法使まほうつかいのおばあさんみたいな正体しょうたいを現あらわして、棒ぼうにまたがつて空そらを飛とんだときも、ぼくみたいにビビりもせず『か、感動かんどう……。』つて、うつとりしてたし。

「おじいさんは、ぼくにも魔力まりよくがあるつていつてたけど、それつて、ぼくも黒鳥くろとりさんみた

いな黒魔法使いになれるってこと？　だねえ。」

おじいさんは答えなかった。ただ青い目でぼくを見つめると、ベンチに木箱をおいた。枯れ枝みたいな指がふたを開く。4の魔スに、リスの形の白いコマがあつた。

「ルーレットをまわしなさい。」

ぼくの手が迷いもせずルーレットに近づき、ドクロのつまみをまわす。

カタカタカタカタ、カタカタ、カタ、カ、タ……、カタン。

『4』

カサカサカサカサ。

リスの人形が、ボードの上を滑りだした。5の魔ス、6の魔ス、7の魔ス……。右はしから一つ手前の8の魔スで、リスのコマが止まった。と思つたら。

カサカサカサカサ。

「また、コマが動きだしたねえ！」

「なにもしてないのに変だねえ！」

「はしごの魔スに止まったからだよ。」

なるほど、8の魔^まスにはしごの絵^えが描^{えが}かれている。はしごは、左^{ひだり}ななめ上^{うへ}へのびていて、その上^{うへ}をリスの白^{しろ}いコマが滑^{すべ}つていくところだった。

コマは、はしごの先^{さき}、二段上^{だんうへ}の24の魔^まスで止^とまった。そこに書^かかれていたのは……。

〈新^{あら}たな師^しにであい、さらなる魔^ま力^{りき}を得^える〉

おじいさんが、ふーつと大^{おお}きなためいきをついた。それから、パタン、パタンと、ゲームのふたを閉^とじると、立^たちあがり。

「ついてきなさい。」

「え……、だねえ。どこへいくの？ だねえ。」

「そのぬいぐるみを取^とつてくれるかもしれない人^{ひと}のところへだ。それに……。」

おじいさんは、びっくりするべくをよそに、勝^か手^てに歩^{ある}きだした。

「もしかしたら、黒魔^{くろま}法^{ほう}使^{つか}いにもしてくれるかもしれない。」



飛^ひ行^{こう}機^き公^{こう}園^{えん}を出^でてから、三十^{ふん}分^い以上^{じょう}、おじいさんはひとことも口^{くち}をきかなかった。

いったいどこへむかっているんだろ。さつきわたったのは落^{おち}合^あ川^{がわ}にかかる橋^{はし}だと思^{おも}うけ

ど、ぼくが知^しつてる遊歩道^{ゆうほどう}や広い河原^{かわら}とは反対^{はんたい}方向^{ほうこう}だし。

さらに、いま、おじいさんはこんもりした大きな森^{もり}へ入^{はい}つていこうとしてる。

「この街^{まち}に、こんな森^{もり}があるなんて知^しらなかつたねえ。」

でも、不安^{ふあん}には思^{おも}わなかつた。ぼくが思^{おも}いめぐらしていたのは、ただひとつ。

ぬいぐるみを取^とつてもらえるかも。黒魔法^{くろまほう}使い^{つか}いにもなれるかも。

黒鳥^{くろとり}さんみたいなの、かつこい黒魔法^{くろまほう}使い^{つか}いに……。

枯^かれ葉^はをふみしめていくと、やがて目^めの前^{まえ}がぱつと開^{ひら}けた。

そこに大^{おお}きな、ふしぎな形^{かたち}の屋敷^{やしき}があつた。灰色^{はいいろ}の石造^{いしづく}りで、四角^{しかく}い二階^{かいだ}建て。屋根^{やね}の

四^よすみから細^{ほそ}い塔^{とう}が四本^{よんぽん}そびえて、小^{ちひ}さなお城^{しろ}のようにさえ見^みえる。

ただ、壁^{かべ}にはつたがはい、どの窓^{まど}もすすけて、なかにはガラスにひびが入^{はい}っているもの

も。飾^{かざ}りなのか、屋根^{やね}のあちこちに小^{ちひ}さな怪物^{かいぶつ}の石像^{せきぞう}まであつて、まるで……。

「亡^{ぼう}霊^{れい}のお城^{しろ}みたいだねえ……。」

けれど、おじいさんは慣^なれた足^{あし}どりで屋敷^{やしき}にむかつていく。そして、ペンキのはげた白^{しろ}

いとびらの前^{まえ}で足^{あし}をとめると、翼^{つばさ}を広^{ひろ}げたコウモリ形^{がた}のドアノッカーをつかんで。

コンコン。

さつと玄関が開いた。まるでぼくたちが来るのを待っていたみたい……。

「あつ、だねえ！」

思わず声もれたのは、ドアの内がわに、小さな外国人の女の子が立っていたから。

身長は一メートルぐらい。

まっ白な丸顔に、透きとおる

ようなブルーの瞳。黒のひら

ひらレースがたつぷりついた

銀色のドレスに、大きな黒い

帽子の下から金髪のおさげ髪

を肩までたらししたがたは、

フランス人形みたいにかわい

い、つていいところだけ

ど。



なぜだろう、背中がぞつとした。なにかがおかしい。そんな気がしてならなくて……。

「グリム・リーパーにございます。アクティル男爵さまにお取り次ぎを願います。」

え、なんで敬語？　って、おじいさん、グリム・リーパーって名前だったんだ……。

「男爵さまは、もうサロンでお待ちです。」

女の子もいっぱしのメイドさんみたいに答えてる。けど、かんだかいその声には、幼き

がありあり……、って、ちよつと待って。いま、女の子の口、動いてた？

ぽかんとするぼくにはかまわず、女の子はくると背をむけ、歩きだした。

「どうぞ、こちらへ。」

外とは正反対に、屋敷のなかは、どこもかしこもぴかぴかに磨きあげられていた。

アーチ形の天井は見上げるほど高く、床はクリーム色の大理石。壁ぎわには、古代ギリ

シャ風の彫刻や、豪華な花を生けた巨大な花びんがずらりとならんでる。

それにしても、いくら森のなかとはいえ、こんなレトロでおしゃれな洋館があつたら、

街でうわさになるはず。でも、そんな話を耳にしたこと、一度もない……。

やがて大きなドアのわきで女の子が足を止めた。そして、体ごと、こちらを向くと。

「どうぞ、お入りください。」

やっぱり口が動いてない！ 目もまばたきしてないし！ どうなってるの？

「そんなにめずらしいかね、大形くん。ビスクドールが話したり、歩いたりするのが。」
うしろで声がした。ふりかえると、ドアのむこうは大きな部屋。そのいちばん奥で、男の人がひとり、高いイスにすわってこつちを見ていた。

紫色の長い髪。細い体に赤いマントと黒のパンタロン。男爵というわりに、ずいぶん若そうだし、細い顔はどことなく女性的……って、ぼくがおどろいたのは、そこではなく。

「あ、あの、いま、ドールつていった？ だねえ……。」

「こら！ ごあいさつもまだなのに、そのような失礼な口をきいては……。」

あわてるおじいさんを、男爵は右手を上げておさえると、ぼくにむかつて続けた。

「人形だよ。顔が白くてつるつるなのは、皿やティーカップに使われる磁器、正確には二度焼きした磁器で作られているからさ。瞳も青いガラス製。二百年前にフランスで作られた傑作でね、黒魔法で命を吹きこみ、ミニョンヌと名づけ、メイドにしているのだ。」

磁器の人形……。黒魔法で命を吹きこむ……。そんな、ばかな……。

「おいおい、これぐらいでおどろかれてはこまるな。リーパー、この子と『ヘビとはしご』ゲームに、ほんとうにつながりがあるのか？ まさか、おまえのかんちがいでは……。」

「め、めつそうもございません、男爵さま！ この子は仮の魔力を得ただけで、黒魔女を見わけ、さらには死霊、魔物まで……。」

あわあわするおじいさんを見て、アクテイル男爵、マントのえりをゆらして大笑い。

「冗談だよ、リーパー。とにかくよく探してくれた。ごくろう。下がってよいぞ。」

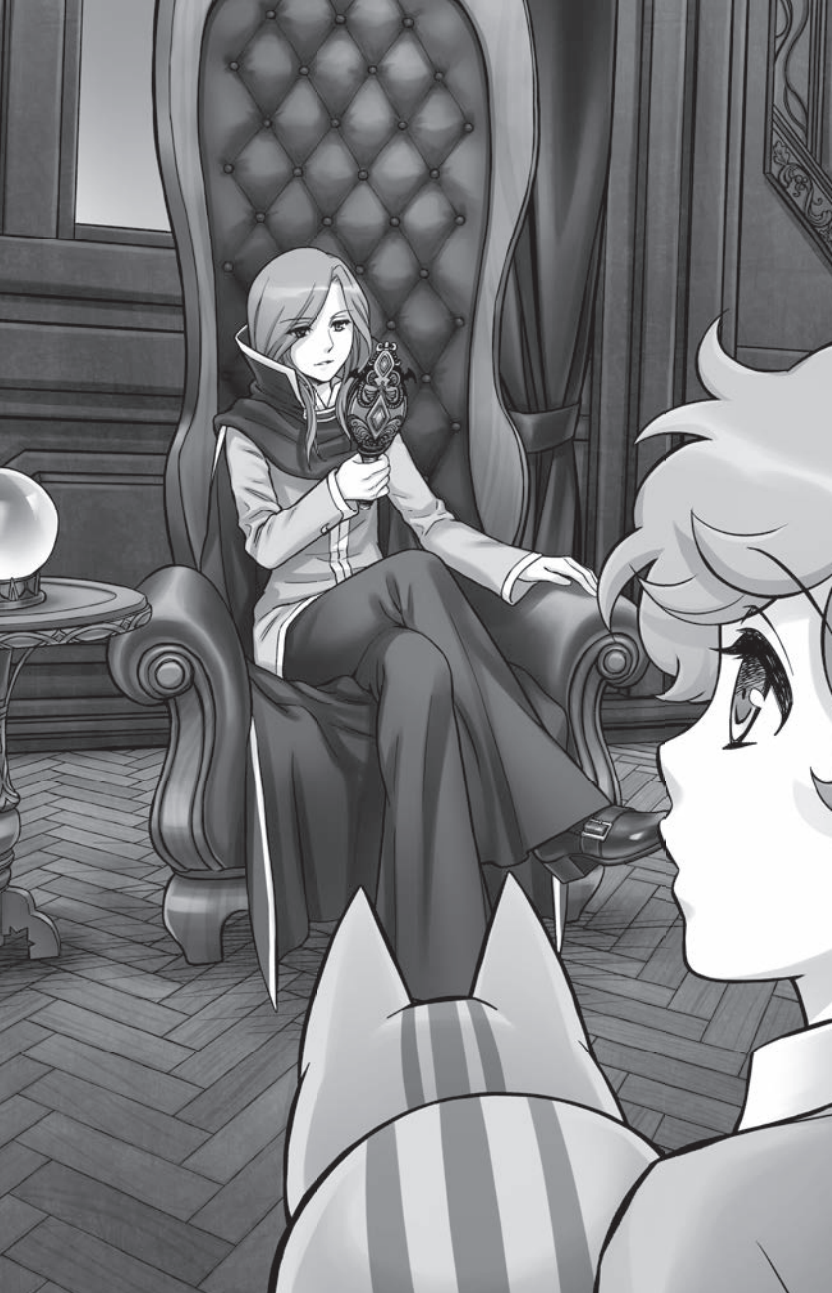
「あ、あの、しかし……。」

「心配するな、ほうびはちゃんとやる。とにかくそのゲームをおいて、帰れ。」

おじいさんはしぶしぶ男爵に歩みよると、頭を下げて、ゲームの入った木箱を差し出した。そして、その姿勢のままあとずさり、サロンを出ていった。

「さてと、大形くん……。」

顔を上げると、どこから出てきたのか、男爵は手鏡をのぞきこんでいた。で、鏡にむかって「美しい……。」そうつぶやくと、こちらに目をむけて。



「きみはクラスメートの女の子を見て、自分も黒魔法使いになりたいといったとか？」

え？ どうして、それを？

「きみとグリム・リーパーの会話はすべて聞いたよ。『ルキウゲ・ルキウゲ・エスクチャーレ』と、地獄耳魔法の呪文を唱えれば、聞きたいことがなんでも聞けるからな。」

ルキウゲ・ルキウゲ……。そういうの、黒鳥さんも唱えてたつけ……。

「その黒鳥さんという子も見たよ。」

男爵はぼくの心を読んだようにいうと、テーブルを指さした。手鏡のとなりに、大きなガラス玉がおいである。

「水晶玉だよ。人間は占いに使うが、魔界の者はこれで見たいものを見る。」

〈魔界〉……。呪文も聞いたし、黒魔女や死霊も目にした。この人もただ者じゃないことはわかってる。けど、あらためて〈魔界〉って言葉を耳にすると、ときつとする。

「たしかにあの子は見どころがあるな。『憂うつな天使』ってところだ。」

「憂うつな天使？ だねえ。」

「五百年ほど前、デューラーという画家が『憂うつ』という意味の題で、天使の絵を描い

た。天使はふつう男性とされるが、その天使は女の子じゃないかといわれていてね、きみの友だちはそれによく似ているんだ。たぶん生まれ持った強い魔力のせいだろう。」

友だち……。黒鳥さんが、ぼくの友だち……。

「もつともインスタクターは、どうしようもない不良黒魔女だと、もつぱらの評判だから、はたして、あの子が素質にふさわしい黒魔女になれるかどうか。」

不良黒魔女。たしかに、ギュービッドはしゃべり方も態度もひどく下品だった……。

「その点、きみは心配はいらないよ。わがアクティル家は、火の国の王に仕えたこともある、由緒正しき男爵家……、と、それより聞いておきたいことがある。」

アクティル男爵は、細くて白い指をぼくの左手にむけた。

「ぬいぐるみが手放せないそうだが、別に接着剤でくっついていてるわけじゃないのだろう？ 取ろうと思えば取れるのではないのか？ たとえば風呂に入るときは……。」

「お風呂に入るときもつけたままだねえ。」

「しかし、それでは……。」

「もちろん、びしょびしょになるねえ。でも、洗い替えがあるねえ。」

「ほかにクマとウサギがあつて、お風呂のあと、さつと交換するねえ。」

「つまり、外せないのではなく、外したくないわけだな。しかし、なぜ？」

「自分でもわからないねえ。とにかく、すぐいやなんだねえ。」

「外したとたん、もうれつにイライラしてきちゃうんだねえ。」

なにか具体的なことに対してじゃない。まわりの人、そこにある物、世の中のすべてが
気に入らないっていうか、どうしようもない怒りにとらわれてしまう。

一度、お母さんが、お風呂場に洗い替えのぬいぐるみをおいておくのを忘れたことがある。
そうとは知らず、びしょびしょのぬいぐるみを外したぼくは、お母さんをどなりつけ
てしまった。ここには書けないような口汚い言葉を、悪魔のような声で。

あのときの、お母さんのおびえた目。思いだすだけで悲しくなる……。

「なるほど。そういう魔力がしかけてあるわけか。だが、それも、このゲームの魔力の前
には、なんの効きめもないだろうよ。」

男爵はひとりほくそえむと、『ヘビとはしご』ゲームのふたを開いた。それから、リス
のコマが止まった24の魔スをのぞきこんで。

「〈新たな師あらにであい、さらなる魔力まりよくを得るえ〉か。では、これから二週間しゅうかん、思いのままに行動こうどうしたまえ。新たな魔力あら まりよくでなにができるか。その内容次第ないようしだいで、正式せいしきにきみのインストラクターになるかどうか、決める。というところで、今日は帰かえりたまえ。」

それだけ？　せめて、ぬいぐるみの取り方かたぐらい、教おしえてもらえと思ったのに。

でも、そうか。おじいさんは『取とつてくれるかもしれない。』っていったんだつけ。ためいきをついて出口でぐちにむかう。すると、男爵だんしやくの声こえが追おいかけてきた。

「わかつているだろうが、この屋敷やしきのことは、だれにもいつてはならんぞ。」
「うわけがない。友ともだちなんてひとりもないんだから。むかしも、いまも。」